

組織統一は要求実現・労働条件改善に大きなプラス

第四回郵政産労札幌定期大会

過日、「郵産労」と「郵政ユニオン」の組織統一後、初の「第四回郵産労札幌支部定期大会」が開催されました。規約改正により、名称は「郵政産業労働者ユニオン札幌支部」と変更されました。

川守田支部長は次のようにあいさつしました。「七月一日組織統一され、「郵政産業労働者ユニオン」になった。道段階も先日統合大会を開催した。組織統一は要求実現・労働条

**郵政産業
ユニオン さっぽろ**

2012年
8月6日
No.1
発行
郵政産業
ユニオン
札幌支部
発行責任者
川守田英男



件改善に大きなプラスになる。小樽・厚別で旧ユニオンの組合員が加入統合した。小樽で一人頑張ってきた旧ユニオン組合員は、タイムカードで勤務時間を記録していても会社は超過勤務をごまかしていたので、是正を追求しつづけてきた。間違っていることは、あきらめず追求していくことが重要だ。オリンピックサッカーで日本は、強豪のスペインに勝った。あの全力であきらめない姿勢は見習



うべきであり、我々の運動にもこれから求められるものだ。十月に郵便二社が会社統合されるが、いろいろな声がでてくる。これらを要求化して取り上げ、たかっつていく必要がある」

小紙は「郵産労第三五回定期大会機関紙コンクール」において、「奨励賞」（職場要求の取り上げ）、「努力賞」（五百号記念）をダブル受賞しました。読者の皆様のたまものであり、今後の励みといたします。

（機関紙担当者一同）

つぶやき

常識に反する真実を認識するのは、なかなかむずかしい。世間の常識がそれを阻害する▼道新小説「水軍遙かなり」が好調だ。主人公は志摩、九鬼嘉隆の子息守隆。織田信長との面談で、水平線の不思議から地球円形の理論を学ぶ▼この時代大多数の日本人は、地球が円いということすら解どころか考えることすらしなかった。そのことを解せる人は希有で、信長はその一人である。もつとも十三才と設定している守隆が理解したかは疑わしい▼信長は世間の常識にとらわれず、何事も自分で確かめなければ信用しない唯物論者であった。それゆえ宣教師がもたらした西欧の科学的見地を難なく理解し、彼らをして驚嘆させた▼郵政グループの赤字が宅配統合の経営失敗にあることは、真実であり世間の常識だ。真実である常識を受け入れない者これまた希有な人種ではある。

全労連と全労協の組織を超え要求で統一

来賓の飯田道委員長は「組織統一し「郵政産業労働者ユニオン」となった。旧ユニオンとは十年前からさまざまな要求をともにたたかってきた。組織統一への話し合いも二五回に及ぶ。「全労連」と「全労協」の組織を超え要求で統一した。国会では消費税が社会福祉のためでなく、公共事業に流すことが密かに民・自・公で論議されてきたことが暴露された。脱原発のたたかいは、金曜ごと一七〇万人の人がツイッターの呼びかけで官邸に押し寄せられている。政府は土俵際においておまれている。危険極まりないオスプレイが岩国に上陸し、おおきな反対闘争が起きている。職場のたたかいに加え、地域の問題にも積極的に参加していきたい」とあいさつした。

費用を無視した 営業強要

討論では、営業ノルマで、「営業せよと言われても客との接点がない。時間外に営業するしかない。会社はその費用をみていない。電話・郵送料などの実費も自腹だ」「契約社員だ。かもメールのノルマは一五〇枚・課長は強要ではないと言いつながらゼロではだめ、何とかならないか言ってくる。時給下がるとおどす」などの実態が話されました。

新人事制度では「格差拡大で不満が増えてくるだろう」との懸念が出されました。集配部門では「配達途上での駐車違反で反則金を数万円払った。二日連続つかまったこと

配達途上の駐車違反は自腹

もある。うちの会社では交通違反は自腹だ。宅配業者は会社を持つている」との告発がありました。組織強化拡大では、「組合員数がこれでは少ない。数は力だ」「苦小牧では期間雇用者に気楽に呼びかけ気楽に入ってもらっている。厚別支部は期間雇用を三〇名拡大している」「ユニオンとの統一を契機に増やそう」と積極的な意見が続けられました。



新三役員

委員長 川守田英男

(札幌支店)

副委員長 野上敬仁

(札幌支店)

書記長 工藤馨

(手稲支店)

札幌での啄木 ③

一六日。曇天・強風。午前、函館の友人へ手紙を書き、午後二時、北門新報社に初出社。勤務は八時まで。校正係の同僚、伊藤氏の風貌を「顔色の悪きこと世界一」などと揶揄。

一七日。夜、教会で高橋卯之助の演説「失われたる者」を聞き「少しく我が心を動かせり」と記している。前日に続き、伊藤氏の恋愛破綻を評し、「最も哀れなるデカダンの人物」「彼何故生けるや、我これを知らず」と容赦ない。雑誌で独歩の「節操」を読み、「彼は退歩しつつあり」と論評。一八日。秋雨。「北門歌壇」一五日の日記と同趣旨の感想文「秋風記」が、北門新報一面に掲載される。夜、向氏らと市中散策。当時市内では近郊の農家が、屋台で様々な農産物を煮炊きして売っていた。産直の元祖である。小樽滞在中の妻とつ子からハガキが来ている。

秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ